

## 男子部・女子部

### 「未来の自由学園を考える」

更科幸一 入海英里子 佐藤史伸

このグループ（男子部：中等科1年1名、2年2名、高等科2年1名、3年2名、女子部：高等科1年3名、2年3名、3年2名 計14名）は自由学園が2年後に100周年を迎えるにあたり、これまでの学園の100年を振り返り、次の100年に向けて学業報告会の機会を使い未来の自由学園について考えた。今回の学業報告会では、男子部・女子部が同じテーマに一緒に取り組んだ。

未来の自由学園を考えるうえで、生徒たちは、「良い学び、良い学校とは？」という本質的な問いを掲げ、共生共学について考えるグループと、社会に働きかける学びのグループに分かれて学びを進めた。共生共学のグループでは、将来自由学園が共学になるにあたって、男子部と女子部それぞれのどのような学びを残すか、どのような学びを進化させるか、そして、新しくする学びは何か、について考えた。社会に働きかける学びのグループでは、日本の社会問題にこれからの学園でどのような取り組みができるのか、また今できることはないのかを考えた。

#### I. はじめに

グループを立ち上げ、生徒たちに何をしたいかを聞いた時に、「共学」について考えたいということが最初の意見であった。生徒たちの関心事は、いわゆる「共学」であり、男子部、女子部のことを興味本位で知りたいという思いが強かったように思う。そこで、未来の自由学園を考える上での本質的な問いを考え、私たちが目指す「良い学び、良い学校とは」を考えることから始めた。その上で、「共生共学」を考えるグループと「今の社会に対応できる学び、今の社会を変える学び」を考えるグループに分かれて進めた。

#### II. 内容

##### ・EQ(エッセンシャル・クエッション)を考える

未来の自由学園について考え始めたとき、皆の認識や方向性を統一させるため、「良い学びとは、良い学校とは」というエッセンシャルクエッションを掲げた。

#### 1. 共生共学グループ

##### (1) 基督教独立学園高校の見学・対話から考える

自由学園が目指す「共生共学」とは何かについて、自分たちの意見を出し合った。

生徒たちがまとめた意見は、『性別や年齢、国の違いなどに関係なく、多様な人々が、共に学び、共に生きること』であった。

このことから共学は、あくまでも共生のための過程であると考えた。そこで、既に共学で自治生活が成り立っていて、且つ教育理念がキリスト教真理に基づいている、山形県の基督教独立学園高校に見学・対話をしに行くことにした。独立学園は寮や行事を生徒自身が運営していて自由学園と共通していることも見学に行く大きな意味であった。しかし、異なっていたのは共学であることから男女関係なく、生活の中でお互いの良いところを出し合っていて、横の繋がりが深いことであった。さらに、生徒や教員の家族の方々も一緒に食事をして、老若男女が共に生活していることから縦の繋がりもあることがわかった。

独立学園の生徒との対話を通し、男女の横の繋がりに加え年齢の縦の繋がりを持つことは、幼児生活団からリビングアカデミーまである学園でも可能ということに気づき、『性別・年齢関係なく分けられないことでお互いを認める』ということを知ることができるといふ考えを持つことができた。この見学は改めて自分たちの学園について考える機会となり、そこから共生という大きな目標に向かって、共学を通してどのような学びが自由学園で

できるのかを考えることが大切だと思える機会となった。その中で、共学化した際にさらに皆が主体的に学ぶ環境にしたいことや、今の男子部・女子部の学びの良いところを残したいという意見が出てきた。

### (2) アンケート調査を行い、「残す学び・進化させる学び・新しくする学び」の3つに分けて考える

「残す学び・進化させる学び・新しくする学び」の3つに分けることができると考え、どんな学びがあるのかを始めはグループ内だけで話し合っていたが、他の生徒にも意識を持ってもらうため、男子部・女子部でアンケートを実施した。アンケートでは共学になっても、男子部・女子部で残したいこと、男子部・女子部の生活の中で社会に出たときに役立つと思うことなどを聞いた。

その結果、男子部では名栗での植林活動やラグビー、木工などが上がり、女子部では主に料理や裁縫、委員などがどの学年にも共通で上がった。このことから男子部・女子部で共通していることは、机の上での勉強だけではなく実際に自分で体験し、生きる学びを大切にしたいということだと分かった。また、このアンケートで皆がそれぞれの意見を書いてくれたことで男子部生・女子部生が学びへの意識をしっかりと持っていることが分かった。

### (3) まとめ(生徒の意見)

今の自由学園では、寮生活や労作など生徒主体の自治生活から、考え行動する力が養われている。また、料理、裁縫、名栗の植林活動、木工など本物に触れる学びも多くある。自由学園の創設時、女子部は大正10年、男子部は昭和10年羽仁先生は女子部・男子部ともに『真の人間教育』を目標とし、今まで女性にふさわしい教育、男性にふさわしい教育をしてきた。創立100周年を迎える今、これからは共生共学を通して男女の枠を超え、共同の料理や美術の授業など総合的な探求をすることによって、よりよい人間教育ができると考える。実際、2021年から22年にかけて、中高の学習指導要領が変わり、文部科学省のホームページには、思考力・判断力・表現力が必要となり、生きる力を育成したいというような内容が書かれている。今後さらに、自ら学び自ら考え主体的に判断する

力が求められるだろう。今社会で求められている力と、自由学園で養われている学びに加え、これからは共生共学についても、一人ひとりが考える必要があると思う。

## 2. 社会に働きかける学びグループ

「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校」というこの演題です。我々はいよいよ社会を創造しなくてはならない。そうして我々は、確かに良い社会を創造し得る。という自信と希望を、その体験を通して被教育者に与えること、そのことのみが、変遷しつつある社会に、最も有力なるものとして、かれらを生かす唯一の方法であるというのが、この講演の趣旨でございます。」

これは羽仁もと子著作集の「教育30年」に書かれている、フランス・ニースにおける第六回世界新教育会議講演での羽仁もと子先生の言葉である。自由学園は当時の教育方法に疑問を持ち、教育を通して、社会に働きかける学校と考えることができる。自由学園は今まで東北セツルメントや北京生活学校などを通して様々な活動を行ってきた。では、これからの自由学園でどのようなソーシャルアクションができるのか。このような思いから活動が始まった。

### (1) 日本の社会問題を考え「子どもの貧困」について考える

現在、日本だけで見ても様々な社会問題がある。その中から「子どもの貧困」について取り上げた。知っている方も多いと思うが日本の子どもの相対的貧困率は、13.9%で、先進国の中ではトップクラスである。この数字は、日本の子どもの7人に1人が貧困であるということを表している。この事実を知って、自由学園で何ができるか考えた。

### (2) 「子ども食堂」を訪問する

はじめに、子どもの貧困を知るため、初等部のスクールソーシャルワーカーである今泉さんの紹介のもと、清瀬にあるごはんの会と、子育て支援NPO法人ウィズアイが行っている親子食堂を、訪問した。そこで、それぞれの代表である、福本麻紀さんと増田恵美子さんにお話を伺うことができた。子ども食堂の見学を通じて、支援を必要としている人たちのニーズに答えることが一番の支援になると感じた。実際に、子どもたちが求めている

るものは、お金やモノだけでなく、安心して食事や勉強ができる場所であることを知った。

### (3) 子ども食堂を作る

そこで、私たちにできる社会活動はこども食堂を作ることだと考えた。現代社会には、子どもの貧困以外にもたくさん問題がある。その問題を解決しようとするとき、支援側は、自分たちが最善だと考える方法で支援を行う。しかし、その支援は、本当に支援を必要としている人たちが求めているものなのか。子ども食堂を作るときに一番大切にしたいことは、子どもたちが何を求めているかを知り、子どもたちに合わせた居場所づくりをすることだと思う。

### (3) まとめ(生徒の意見)

今回は、こども食堂という形でしたが、他にも自由学園でできることはあると思う。なにか問題を知ったとき、問題を解決したいと思ったとき、何かアクションを起こしたい。

今の学園はまだまだ社会活動を行にくい部分もあると思う。しかし、このこども食堂を作るという活動が、未来の自由学園の土台となりきっかけとなることを願っている。

## Ⅲ. 終わりに

### (生徒たちの意見)

私たちははじめ、自由学園が打ち出した「共生共学」に興味本位でこのグループに入った人が多数だった。しかし、話し合いを重ね、たくさんの人の意見を聞いたり、他校に足を運んで対話をしたりしたことにより、共生共学の意味を真剣に考えることができた。また、さらに自由学園における共生共学を考えたことで自分たちの学園と向き合い考え言葉にして伝える難しさを感じられた機会だった。

学業報告会準備期間中、『良い学びとは、良い学校とは』という複雑で正解のない問題を問い続けてきた。今回の報告会は通過点であり、これからも考え続け、行動に移して行きたいと思う。

### (まとめ)

今回の学びを通して、男子部と女子部の話し合いの雰囲気や価値観が違うことを生徒たちは実感した。しかし、価値観の違いを実感したと同時に、生活している環境や行っているカリキュラムが違

っていても得ている学びは似ているところもあると気づくことができたようであった。男子部・女子部では、共生共学に対して、ネガティブな意見を持っている生徒も少なくない。しかし、今回の学びを通して、男子部・女子部生の共生共学に対する考えがポジティブなものにできると確信できた。さらに、生徒とともに、学びを進めていきたい。

また、この報告は新たな100年への一歩であり、生徒たちも書いているように、通過点であると考えている。今後、男子部、女子部がお互いを知る機会を増やし、積極的な交流や行動が増えたら良いと思っている。

### <謝辞>

この場を借りてお世話になった方々にお礼をさせていただきます。

- ・基督教独立学園高校
  - ・南アルプスこどもの村小中学校
  - ・NPO 法人ウィズアイ 増田恵美子さん
  - ・ごはんの会 福本麻紀さん
- ありがとうございました。